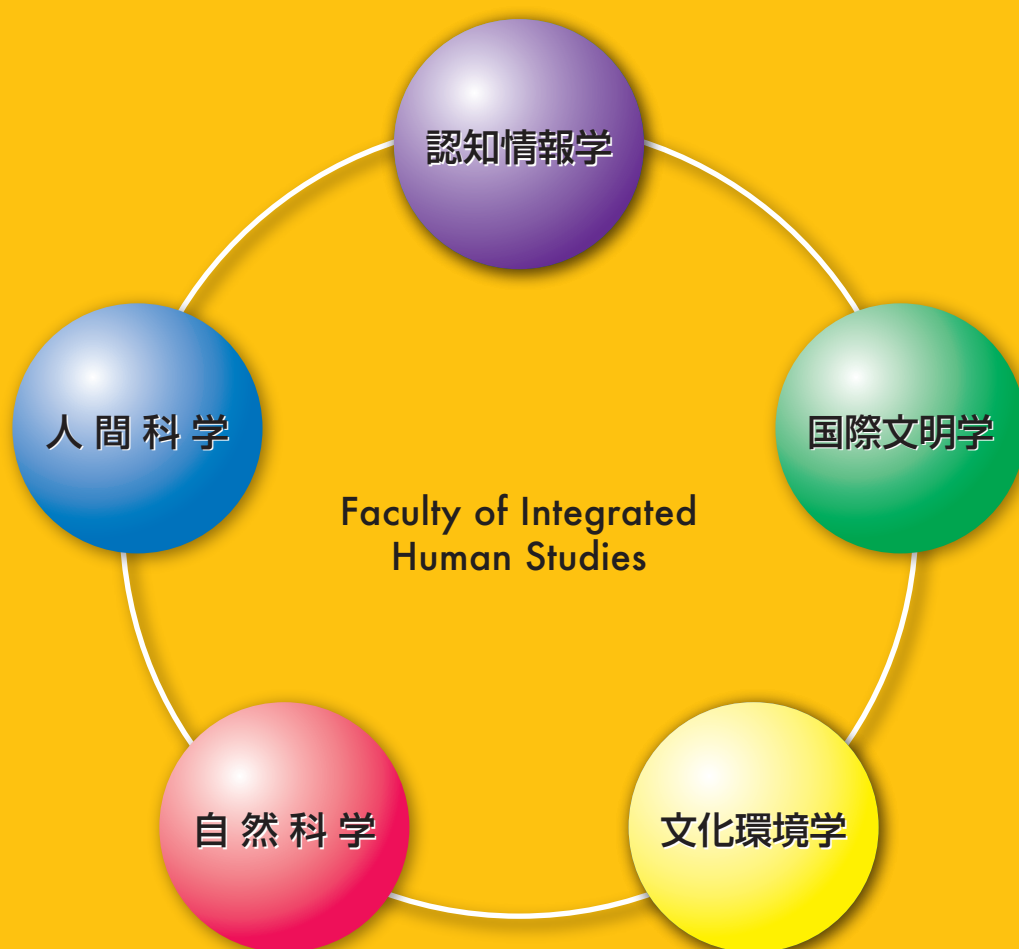


京都大学 総合人間学部



2020

Contents

学部長挨拶	1
教育研究上の目的と方針	2
新たな「人間の学」をめざして	3
5学系による学部構成の意義	3
学系紹介	
人間科学系	4
認知情報学系	5
国際文明学系	6
文化環境学系	7
自然科学系	8
入学から卒業まで	9



沿革

平成4年10月	総合人間学部設置
平成5年4月	総合人間学部第1期生入学
平成9年3月	総合人間学部第1期生卒業
平成15年4月	1学科5学系に改編
	組織改編により、大学院人間・環境学研究科へ教員組織を統合

学部長挨拶

総合人間学部は平成4年（1992年）に設置されてからの四半世紀で、3000人ほどの卒業生を学術や実務の世界に送り出しました。卒業生が体現する「総人」らしさというものが、次第に社会に認められるようになってきました。それは幅広い関心や独創性と言いつけられるものだと思います。またその一方で、京都大学で最も新しい学部としての若々しさも維持されていて、よりよい教育のありかたについて教員の間で議論が繰り返行われています。あえて組織を人間になぞらえてみるならば、本学部は青年期にあると言えるでしょう。

この25年間に、世界と日本は大きく変わりました。いまの時代を象徴するグローバル化という概念も、本学部ができた頃に使われ始めたものです。気候変動はいまや科学的検証を経て危機として捉えられるようになりましたが、当時はまだマスコミで懸念として提起され始めたところでした。日本にはバブル経済の余韻が残っていましたが、問題化していた少子高齢化は現在では年間数十万人の人口減少へと実質化しています。普及段階だったパソコンやインターネット、まだ形もなかったスマホが、私たちの生活の必需品となっています。

総合人間学部が創られたのは、科学が専門領域ごとに深化してゆく一方で、現実社会の急速な変化と課題に取り組むためには、専門領域の境界を越えた交流や、新たな学問的融合が必要であるという時代の要請に基づくものでした。そして四半世紀の社会変化はその要請がますます拡がり深まっていることを示しています。なぜ学部という一つの組織でこの壮大な目標に立ち向かおうとしたのでしょうか。それは多様な専門領域の研究者によって学部教育が担われるという本学部の教員構成が基礎となっています。すなわち、新たな発見をめざす自然科学、よりよい社会をめざす社会科学、価値を見出す人文科学の研究者が一堂に会していることです。

総合人間学部がもつこの幅広い学問性を理解するためには、その長い歴史を振り返ることが必要です。本学部の教員

京都大学総合人間学部 学部長
人間・環境学研究科 研究科長

小島 泰雄



は、京都大学の全学生に向けた教養教育・基礎教育の授業も担当しています。これは教養部という組織を本学部が引き継いだことによるものです。戦後の大学教育では戦争への反省から教養教育の大切さが認識され、京都大学では40年にわたってそれが教養部において担われてきました。そしてこの教養部の基礎となったのが、明治の初年に創設された舎密局・洋学校に始まる第三高等学校です。「自由と自主」という京都大学の学風は、「三高」が一つの源であるとされますが、学生と教員が対話を通して人間、文明、自然の新しい結びつきを考える風土が、総合人間学部を特徴づけているのも、この歴史からすると当然なのかもしれません。150年の記憶を本学部はその根底に持っているのです。

「学際」「融合」は総合人間学部の本旨ですが、それは簡単に実現できるものではありません。学際は専門領域を前提とする研究活動ですし、融合は新たな専門領域の創出をめざすものです。本学部はそれらを涵養する場となることを目指していますが、実現するのはそこに学ぶ学生一人ひとりです。理系と文系という区分けは、入学試験においてこそ存在しますが、入学後にそれが問われることはありません。数学や物理に秀でた人文・社会科学を専攻する学生は少なくありませんし、歴史や哲学に興味をもつ自然科学を専攻する学生も多くいます。一つの専門領域を修得することでさえ、相当の努力を必要とすることですが、それに加えて本学部が副専攻という制度を持つのは、一つの専門領域に安住しないという意志を共有しているからです。学問をする面白さを知った「総人生」は、本学部と一体となって運営されている人間・環境学研究科をはじめとした大学院に進学しています。そして社会に飛び出した総人生が本学部で身につけた教養という生きる力を活かして、ますます各界で活躍することを期待しています。

教育研究上の目的と方針

総合人間学部 教育研究上の目的

総合人間学部は、人間と文明と自然の結びつきに新たな次元を確立するために、人類が直面する様々な問題を人間活動の広範な諸領域を通低させる形で問い直し、これまでの人文科学、社会科学、自然科学を融合した新しい学問の体系を構築することを、すなわち、新たな「人間の学」の創出を目指す。さらに、このような学問的探求を通じて、科学技術の急速な発展と国際化の進展など著しく変化するこれからの社会に対して、持続的かつ創造的に対処しうる広い視野を持った人材を育成することを目的とする。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

総合人間学部は、たえず変化する現代社会における人間と文明と自然の新たな結びつきを見出すために、人文科学、社会科学、自然科学を横断する「人間の学」の創出をめざしています。この挑戦に積極的に加わりようとする志をもつ人、高い倫理性と豊かな人間性を持ちつつ、国際的視野から人類が直面する様々な課題に向きあおうとする進取の精神をもつ人、持続的で創造的な取り組みを支える教養を身につけたいと考える人を本学部は求めます。

総合人間学部が入学を希望する人に求めるものは、高等学校の教育課程の教科・科目を広く修得し、自らが学ぶとする分野の基礎となる知識を身に付けていることに加えて、その内容を活用する主体的な思考力・判断力・表現力、そして他者と協働しながら学ぶ態度です。

総合人間学部の入学者選抜は、京都大学の一般入試において、文系試験と理系試験の2つに分けて実施し、多様な基礎的学力を測ります。また本学部独自の特色入試では、高等学校における学びの成果、基礎的学力とともに、文系と理系の総合的な思考力・表現力を評価します。これらの入試においては、総合的な学力の評価を行うために大学入学共通テストの成績を取り入れ、合否判定を行っています。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

総合人間学部では、新たな「人間の学」の創出を主軸として、卒業の認定に関する方針に示した目的を達成するために、多様な学問分野を網羅する教員陣のもとで、教養教育・基礎教育と専門教育を体系的に一体化したカリキュラムを提供します。比較的近い学問分野で構成する学系を複数設置し、各学系のコースツリーならびに個別の学問分野の履修モデルを提示することにより、カリキュラム体系の構成を具体的に示します。講義や演習等として行われる個々の授業科目の内容および、定期試験・レポート・平常点による評価方法の詳細については、シラバスに記載します。

総合人間学部にも所属する学生には、以下の指針に従って自律的に学修することを求めます。

1. 文理にまたがる多様な教養・基礎科目、複数の学系の入門科目、複数の外国語科目等を幅広く学び、人間・文明・自然に対する幅広い知識と理解力を修得し、豊かな人間性と高い倫理性を育む。

2. ゼミ・演習等の少人数科目を履修し、教養・基礎から専門の領域にわたる知識と能力を濃密な議論の中で培うとともに、他者に自らの見解を表現するためのプレゼンテーション能力および対話能力を身につける。
3. 学年の進行とともに、自らの学問的関心に応じて一つの学系を主専攻として選択して系統的に学び、自らの知的な核となる専門性を修得する。
4. 主専攻とは異なる学問分野を副専攻として系統的に学び、自らの専門分野に捉われない柔軟で重層的な思考力を養う。
5. 主専攻の分野において指導教員を選び、そのもとで卒業論文・卒業研究に取り組む。学修成果は複数の教員により審査される。こうした研究過程を通して、専門性を深めるとともに、現代の諸問題の解決に挑戦する創造的姿勢と持続力を育む。

ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

総合人間学部は、人間と文明と自然との新たな結びつきを見出す「人間の学」の創出を目指しています。また、この学問的探究を通して、高い倫理性と幅広い視野から創造的かつ持続的に現代の諸問題と向き合い、多様な人々と協働しながらリーダーシップを発揮する人を育成することを目的としています。これを達成するため、以下の点に到達した者に総合人間学部学士号を授与します。

1. 総合人間学部が提供する学際的な学問の場において、人文科学・社会科学・自然科学を横断する幅広い知識と教養を身につけていること。
2. 他者や異文化に対する理解を深めた上で、自らの見解を形成し、それを豊かに表現するプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力、ならびにリーダーシップを培っていること。
3. 多様な学問分野を学ぶ中で、自らの知的な核となる特定の分野を選択し、その理解を深めていること。
4. 主たる専門分野とは異なる、もう一つの分野も重点的に学ぶことによって、人間・文明・自然に対する、多角的な視点や柔軟な発想力を培っていること。
5. 卒業論文・卒業研究において、問題の設定からその解決方法の提示に至る研究過程に取り組み、一定の成果を上げていること。

新たな「人間の学」をめざして

現代の科学技術と産業社会は、高度に分化・専門化することによって発展し、私たちの文明に多くの物質的利便をもたらしました。しかし、そうした分化・専門化が極度に進むことにより、科学にとっても社会にとっても、現実の全体像を把握することが困難になってきました。物質的繁栄の陰で、自然環境の破壊や社会的対立、生命観・価値観の混乱が、いっそう深刻なものとなっています。

人類は、このような現代文明のいわば負の遺産を克服し、未来に向けて地球環境との共存を図っていかねばなりません。そのために、私たちはどのような経済活動、どのような生活様式を生み出さなければならないのでしょうか。また、自然と人間との新たな調和を可能にする文明を築き上げるためには、どのような倫理観・価値観を創生しなければならないのでしょうか。

こうした問いに答えるためには、人類がいま直面しているさまざまな問題を、人間活動の広範な諸領域を総合的に捉える試みの中で問い直し、これまでの自然科学、人文科学、社会科学を融合した新たな学問体系を構築することが必要となります。

総合人間学部は、自然と人間と文明の結びつきへの新たな次元を確立するため、異質な学問分野の接触と相互作用を基盤とした人間探究のためのニューパラダイム、すなわち、新たな「人間の学」の創出をめざしています。

総合人間学部は、このような学問的探究を通じて、科学技術の急速な発展や国際化の深化など激しく変化する21世紀の社会に対し、持続的かつ創造的に対処しうる広い視野を持った人材を育成します。

5学系による学部構成の意義

人間をめぐる現代の複雑な状況は、人間について蓄積されてきたこれまでの叡智を踏まえ、人間についての根源的、総合的理解を緊急に進めることを、私たちに求めています。この要求に応えるため、思想、社会、文化といった多様な観点から、人間の総体的な把握がなされなければなりません。こうした観点から現代の人間の在り方を系統的に学ぶことによって、従来存在しなかった新しいタイプの人材を養成するため、「人間科学系」が設置されています。さらに、人間と機械の情報処理の問題を総合的に学ぶことは、焦眉の急となっています。脳の機能の探究から、人間の認知、行動発現、言語機能の探究、さらにはその基礎をなす情報科学や数理科学にいたる広範な領域を深く学ぶため、「認知情報学系」が設置されています。

世界のグローバル化が進む状況のなかで、西洋ならびに近代主義と、非西洋ならびにその固有の文明を、多様かつ複合的な視点から捉えることが要請されています。近代主義を主として社会科学や歴史文化研究の視点から分析し、いち早く近代化した日本の在り方を検討するとともに、東アジアとの比較を行うことによって新たな国際的な文明の理念を構築するため、「国際文明学系」が設置されています。また世界各地の固有の民族性や地域性、人間にとって基本的な居住の視角から各文明の特質を解明し、文明相互の交流を理解するため、「文化環境学系」が設置されています。

自然を理解し、人間と自然の共生を保持するために、多様な自然現象を物理学、物質科学、生物科学、地球科学的手法によって探究し、自然現象の構造や基本原理を明らかにする必要があります。自然科学の諸分野の基礎を学ぶとともに、自然と人間の共生関係を維持するための自然観・物質観を養成するため、「自然科学系」が設置されています。

以上5学系から総合人間学部・総合人間学科が構成され、それらのダイナミックな連携のもとでの教育と研究をめざしています。

人間科学系

Human

Sciences



科学技術と情報ネットワークが急速に進展するのにもない、私たち人間をめぐる社会環境と地球環境はここ数十年のあいだに大きな変化を経てきました。この変化に対応するかのよう、人間についてのこれまでの知では十分に説明しきれないような、さまざまな人間行動や社会現象が生じています。本学系は、諸科学において蓄えられてきたこれまでの人間についての知を前提にしながらも、人間をめぐるこうした現代的状況を踏まえて、人間についての知を刷新し、新しい学を構築することを目的としています。この目的を実現していくための道筋には、次の三つがあります。

- (1) 近代社会が構築してきた人間観が崩壊するのにもない、これまで以上に重要な意味を持ってきている問い——「人間とは何か」という問い——に迫る。
- (2) いかなる人間も一人では生きていくことができない。人間はつねに社会的存在である。このような視点に立ち、人間の社会性の構造と歴史を考察する。
- (3) 人間はいかに社会的か、人間はいかに歴史的か、要するに人間とは何か、これらの問いを、文学・映画などの文化現象を通して具体的に探る。

第一の方向は「思想」研究の方向と名づけるべきもので、哲学や倫理学などの伝統を踏まえた人間存在についての思想を解明するとともに、造形芸術や演劇などに見られる人間の創造の営みに、理論と歴史の両面から迫ります。第二の方向——人間の「社会」的基盤を探ろうとする方向——は、社会のなかでの人間のあり方、行動、あるいは人間の自己形成の過程を、理論と実証の両面から追求します。第三の方向は「文化」研究に向けられ、文学・映画などの文化的所産を、歴史と社会のなかに位置づけながら考察し、テキストやテキストの背後にあるものより深い解釈をめざします。「思想」「社会」「文化」、これら三つの方向を有機的に関連させながら、本学系は、いまこの時代に人間として存在し、人間として生きることはいかなる意味を有しているかを追求し、新しい時代に立ち向かっていこうとするものです。

授業科目

入門科目

人間科学入門

人間形成論関係

人間形成論、人間形成史論、関係発達論、精神病理学・精神分析学

社会行動論関係

人間行動論、社会情報論、社会心理学

文化社会論関係

ヒストリー・オブ・アイディアズ、動態映画文化論、制度・生活文化史、メディア・スタディーズ

人間存在論関係

自己存在論、認識人間学、哲学・文化史、人間実践論、人間存在論

創造行為論関係

創造行為論、近代芸術論、舞台芸術論、創造ルネッサンス論

文芸表象論関係

英米文芸表象論、ドイツ文芸表象論



国際シンポジウムの模様

認知情報学系

Cognitive

Information



脳・身体・言語・数理情報などに関する研究を通じて、人間および計算機の多様な創造世界に関する理解を深めることが、本学系の目標です。人間同士、あるいは人間と環境との関わりは、脳、身体、言語等をインターフェースとして行われています。環境の認識と環境への働きかけは、脳内の認知機構と運動制御機構の発現によって実現されるものです。人間相互のコミュニケーションは言語システムを媒体としており、それを媒介する計算機の情報処理は、複雑な数理機構が関与しています。また脳の知的作業の最も昇華された世界が、数学的認識であるといえることができます。

具体的には、以下のようなことを学びます。

- (1) ハードウェアおよびソフトウェアとしての脳の機能を、行動学的・認知科学的・神経科学的手法を用いて解明し、人間の知性と創造性の基本原理を理解すること。
- (2) 高度な機械文明の発達による超運動不足やエネルギー摂取・消費のアンバランスや偏った食生活と遺伝的要因により発症する生活習慣病の生理学的・病理学的・運動科学的メカニズムを探求し、予防医学の発展に寄与すること。
- (3) 情報の表現とその処理に関する理論を考究し、実践的に応用すること。コンピュータによる学習、推論などの知的な情報処理について理論と応用の両面から探求すること。
- (4) 種々の現象の数学的モデルを構築し、それを数理科学の手法を用いて解析し、我々をとりまく世界の認識を深めること。
- (5) 我々の認識を反映している自然言語・人工言語の構造と機能、生成と理解のプロセスを明らかにし、自然言語や形式言語のメカニズムとその背後の認知のメカニズムを解明すること。
- (6) 外国語教育のための理論的研究を行い、効果的で効率的な外国語教育のための教材や学習支援システムを開発すること。

このように、本学系では、認知科学、行動制御学、身体機能論、情報科学、数理科学、言語科学や外国語教育論にいたるまでを総合的に学ぶことができます。その過程で、従来の理系・文系という枠を越えた幅広い探求能力と、人間の認識行動の総合的理解に基づく科学的で柔軟な思考能力を身につけることを目指しています。

授業科目

入門科目

認知・行動科学入門
言語・数理情報科学入門

認知・行動科学関係

システム脳科学、記憶機能論、脳情報学、視覚認識論、生活習慣と生体機能障害、細胞生理学、運動の生理学、運動のしくみ、神経生理学の基礎、精神保健福祉概論

数理情報論関係

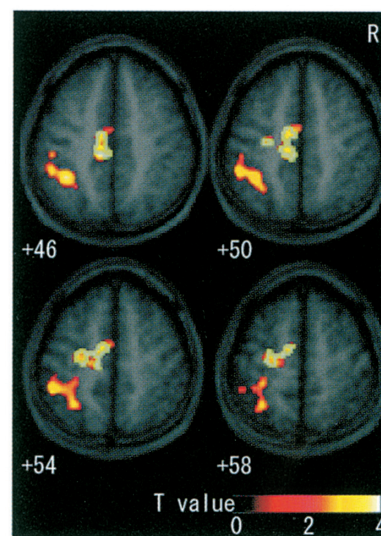
数理現象論、数理構造論、数理科学ゼミナール、数理科学特論、複素解析、実解析、計算機科学の基礎、情報処理の方法と演習、計算論、計算と位相、情報数学、プログラミング演習、機械学習の基礎、人工知能

言語科学関係

言語構造論、言語機能論、言語認知論、言語比較論、言語科学ゼミナール

外国語教育論関係

英語学習指導論、英語教育方法論、英語コミュニケーション論、言語教育政策論、日本語教育論



脳のはたらきをさぐる

国際文明学系

Multi-
Disciplinary
Studies of
Civilizations

西欧において発展してきた近代主義は、政治参加の大幅な拡大、経済的な繁栄、情報の利便化、そして世界の一体化などをもたらしました。しかし、その反面、たとえば市場競争の原理に立脚した文化や生活構造、人間の感性や価値観のありかたに対する影響、グローバル化と地方文化・生活文化との矛盾、そして深刻な環境問題など、複数の領域を複合した諸問題を生み出しました。

本学系では、近代主義について多面的な検討を加えることを念頭に、その現状に対して、政治論・経済論・法律論・社会論・科学論・メディア論・環境論などの諸領域を横断的に相関させた分析を加えます。そして、西洋史を通しては、その歴史的背景を追求し、欧米文化の研究によって、近代主義の文化的表現の解明をめざします。また、日本史を通しては、近代主義が受容される以前の独自の歴史・文化を分析するとともに、いち早く近代化した日本のあり方を検討し、東アジア文化との対照を行うことで、近代主義の相対化を行います。これらを通して、近代主義が生み出した諸問題を解決するにふさわしい、国際的で新たな文明の理念を構築することが本学系の目的です。

現代社会に関する社会科学系の諸分野と、日本・東洋・西洋の歴史・文化に関する諸分野の知識・方法論を総合的に修得することで、既存の文系諸学部とは異なる、学際的な教養と柔軟な思考を有する学生を育成します。

以上の目的のもとで、本学系では次のようなことを学びます。

- (1) 政治論・経済論・社会論などを相関させた分析手法を学ぶ。
- (2) 欧米の歴史や文化の研究を通して近代主義とは何かを学ぶ。
- (3) 日本文化のあり様を東アジアのなかに位置付けてより深く考察する。



画像を用いた文明構造論 I の授業風景
(江田憲治教授)

授業科目

入門科目

国際文明学入門

社会相関論関係

文明構造論、現代社会論、多文化社会論、国際関係論、国家・社会システム論、社会経済システム論、公共政策論

歴史文化社会論関係

欧米歴史社会論、日本歴史文化論、中国社会論、中国文字文化論、中国古典講読、中国書誌論、中国文化論、日本語学・日本文学、書論・書写、日本古典講読論、日本語学文献講読論、西欧近現代表象文化論、西欧古代・中世表象文化論



ゼミナールの様子 (池田寛子准教授)

文化環境学系

Cultural

Environment



世界の各地では、地域特有の自然環境に影響を受けるとともに、特定の言語・宗教や社会・経済などの諸条件のもとに、固有の民族性や地域性が長い歴史の過程の中で育まれてきました。これに加えて、とくに16世紀以降、非西欧世界の諸文明は、世界化しようとする西欧文明との衝突と受容を通して、みずからの地域文明の特性を維持しながらも、伝統文化の苦悩に満ちた消長を経験してきました。

本学系は、近代文明のグローバル化が進展する現代にあって、その基層単位をなす世界各地固有の民族性や地域性、人間社会にとって基本的な居住の諸相の実態と、将来的な意義を見定める視座の確立を追究します。そして、各文明の地域的特性を多角的に比較しながら、文明相互の交流とその文化的所産、さらには文明の自己相対化の諸相を複眼的な視点から解明します。

世界の諸文明の特質を比較対照しつつ学び、それらを相対化して捉える習慣を身につけ、人間社会に対する基本的な理解とグローバルな視点に立って、諸文明の交流を通時的かつ共時的に把握し、その交流の現場にかかわりうる包摂的能力を備えた学生の育成をめざします。

そのために、本学系では次の3点を教育の柱にすえます。

- (1) 文明の問題に関しては、日本人の常識がかならずしも世界の常識ではないことを理解する。
- (2) 文明はたえず交わり合い変わってゆくのに、その自己同一性は長く保たれるという複雑な存在であることを理解する。
- (3) 文化や環境の諸問題を研究する上では、教室や図書館で学ぶことに加えて、現場で学ぶという姿勢が欠かせない。本学系ではフィールドワークに関するトレーニングを通して、現場で学ぶことの重要性を身につけることをめざす。

授業科目

入門科目

文化環境学入門

比較文明論関係

ユーラシア文化複合論、文化交渉複合論、東アジア比較思想論、ポストコロニアル思想文化論、東アジア文化交渉論、東アジア比較芸術論

文化・地域環境論関係

環境構成論、社会人類学、環境人類学、文化実践論、生態人類学、文化人類学、地域空間論



中国江蘇省の鵝飼い調査

自然科学系

Natural

Sciences



自然界を構成する物質及びこれらをもとに人工的に合成された諸物質の物性、構造、化学反応性、機能性等を調べ、物質の本質を探究します。また、自然界に生存する生物の多様性や生態、さらにそれら生物を細胞レベル・遺伝子レベルで研究し、人間を含む生命体をもつ機能や構造を明らかにします。さらに地球・宇宙を構成する物質の構造や分布及び地球・宇宙の歴史や変遷・変動を解明します。

これらを目的として全体として物質や生物及び地球・宇宙を支配する基本原理や相関関係を把握することをめざした学系が自然科学系です。そのためこの学系は自然科学を構成する主な学問分野である物理科学、無機・有機化学、生物科学、地球科学で構成されています。

自然科学系では、以下のようなことを学びます。

- (1) 物質のもつ基本的性質を原子、分子、電子およびその集合体のレベルから理解し、それらの織りなす多様な物性現象や新奇現象の本質を解明するとともに、今日の科学技術の発展の基礎を修得し、物理学の新しい展開の方向を探究すること。
- (2) 様々な無機および有機物質と生体との相関を解明し、それらの機能と微視的構造を明らかにするとともに、化学反応の仕組みや制御法を研究して、優れた機能をもつ材料や目的物質を環境負荷なく創製するための基礎を養うこと。
- (3) DNA レベルから生態系レベルまで、各階層の生命現象と生物の機能をさぐり、また生物の多様性と進化ならびに様々な種間関係とそれらが織りなす生態系の仕組みを探究すること。
- (4) 自然界を構成する気圏・水圏・地圏の物質構成・構造や化学的・物理学的動態、地球・宇宙のダイナミクスを探究するとともに、宇宙の誕生から地球46億年の歴史を振り返り、地球環境の変遷とその仕組みを解明すること。

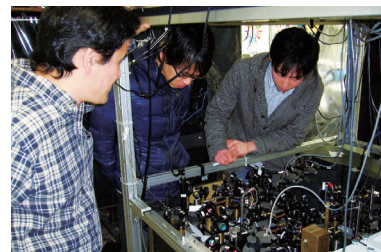
さらに学系全体として、自然界の森羅万象に興味をもち、それらを統合的に理解する能力を養うことをめざしています。そして、自然科学の諸分野の基礎を系統的に学修するとともに、他の学系と連携して人間と自然との共生関係を探究するための総合的な自然観と物質観を養うこと、ならびに論理的な思考を涵養することを目標とします。

授業科目

自然科学入門
 分野を横断する自然科学
 地球と生命の起源と進化
 体験から学ぶ超伝導、量子力学、統計力学、物性物理学、物性特論、物質分析論、物質機能論、物質構造論、物質反応論、物質変換論、分子構造論、分子反応論、フロンティア化学、生体分子機能論、細胞生物学、分子細胞生物学特論、自然史特論、生物適応変異論、生物多様性・生態学、物理学演習、物理数学演習、物質構造機能論、分子構造機能論、分子細胞生物学、自然史、地球科学、総合フィールド演習

課題演習

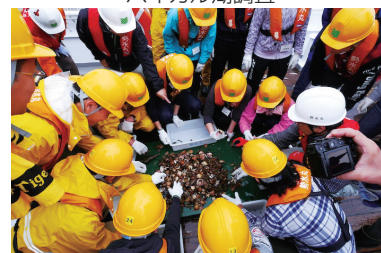
物理科学、物質の構造と機能、分子の構造と機能、生物学、地球科学



物理の課題演習



バイカル湖調査



総合フィールド演習

入学から卒業まで

入学試験（120名）

一般入試(前期日程)

第1段階選抜は、大学入学共通テストの成績等により行います。

第2段階選抜は、文系型試験(定員62名)と理系型試験(定員53名)に分けて行います。

特色入試

提出書類、能力測定考査、及び大学入学共通テストの成績を統合して選抜(定員5名)を行います。

専攻の決定

一般入試「文系」または「理系」、特色入試「学力型AO」という入学試験の形態にかかわらず、本学部入学生はすべて、入学後1年間、どの学系にも分属しません。自由な学風のなかで、幅広い学問分野に触れ、自分の専攻する分野を見極めた上で、2年進級時に主専攻を決めて、学系に分属します。

人間科学系

認知情報学系

国際文明学系

文化環境学系

自然科学系

4年一貫教育

柔軟で広い視野を持つ知性の涵養を目的とした全学共通科目と、総合人間学部固有の授業科目を、4年間を通じて有機的に結合させたカリキュラムで実施します。事実上、総合人間学部の大学院である「人間・環境学研究科」の教員が主として、総合人間学部の学部教育を担当し、指導教員となっています。また、卒業論文・卒業研究指導教員とは別に、教員アドバイザー制度、担任制度ならびに学部固有の学生相談室を設け、履修上の指導と学生生活上の相談に応じます。

副専攻制度

総合人間学部では、広い視野を持ち創造性豊かな人間を育成する目的で、主専攻のほかに、副専攻の制度を設けています。副専攻は、各自が所属する学系の専門分野以外の特定の分野を系統的に履修する制度です。これによって、主専攻以外の分野においても専門的知識と深い素養を身につけることができます。副専攻は、指導教員とよく相談の上、各自で選択します。副専攻を修得したことに対しては、学士の学位記とは別に副専攻名を記した認定書が発行されます。

卒業後の進路

大学院進学

総合人間学部の大学院進学希望者の多くは、直結する「人間・環境学研究科」を受験して進学しています。

本学の他の研究科や他大学の大学院に進学することもできます。

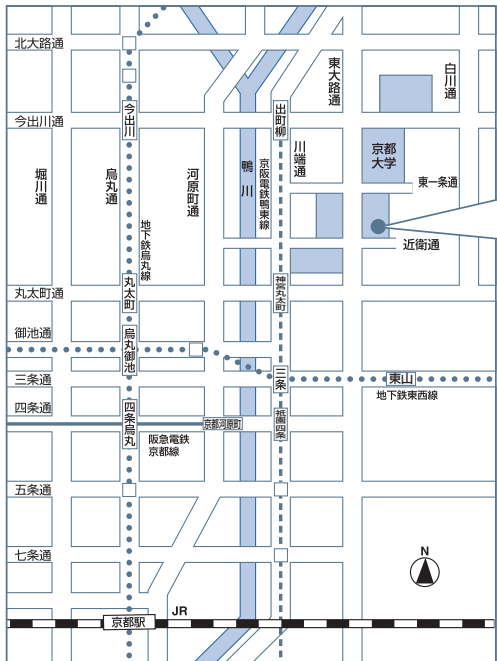
就職

総合人間学部の卒業生は、主専攻の履修だけでなく、副専攻の履修や、幅広い分野の学部科目を履修することにより、広い視野と柔軟な思考力を備え、総合的な判断力を身につけているものと、社会から期待されています。また、卒業生は、のびやかな個性と独創性が高く評価され、文系から理系に至る幅広い職種に就職して、その社会的期待に応えています。国家機関、地方自治体、民間企業等での活躍の道が、大きく開かれています。

卒業生の就職先（過去5年間）

学部案内用 (学校基本調査分類に基づく)	年	就職先																																											
		農業・林業	建設業	食料品・飲料・たばこ・飼料	繊維工業	印刷・同関連業	化学工業・石油・石炭製品製造業	鉄鋼業・非鉄金属・金属製品製造業	はん用・生産用・業務用機械器具製造業	電子部品・デバイス・電子回路製造業	電気・情報通信機械器具製造業	輸送用機械器具製造業	その他の製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	情報通信業	情報通信業	郵便業	卸売業	小売業	金融業	保険業	不動産取引・賃貸・管理業	物品賃貸業	学術・開発研究機関	法務	その他の専門・技術サービス業	宿泊業・飲食サービス業	生活関連サービス業・娯楽業	学校教育	学習支援業	医療業・保健衛生	社会保険・社会福祉・介護事業	複合サービス事業	サービス業(他に分類されないもの)	サービス業(他に分類されないもの)	その他	国家公務	地方公務	左記以外のもの						
男	H26				1	1		2	1	1		2	1	13	2	6	1	4	2				1						1	2	1													1	1
	H27				2							6		14	1	4														1														1	1
	H28		1	1				1	2			1	2	7	3	1	9	2	2				3				3	1															1	3	1
	H29	1		1								1	14	2	1	1	7	1	5	4	2			7																				1	1
	H30					2					1	1	1	1	7	2								8	2			1																2	
	小計		1	1	2	0	3	5	1	4	4	2	2	12	2	55	5	16	3	35	9	4	0	19	3	3	2	2	4	8	0	0	0	0	0	0	0	5	6	2					
女	H26			3	1		2		1				3				4																											2	1
	H27			1	1		3			0	1		3	9	1		3				2								1															1	
	H28			1	1				1				3				1	2	2					1		4						3	1									1	1	1	
	H29											1	4		10	2								2																				1	
	H30												1	9			2							2																				1	2
	小計			0	0	5	2	1	7	1	1	1	3	7	1	34	2	7	0	13	4	6	0	7	1	4	0	1	1	5	1	0	0	0	0	1	2	6	2						
合計			1	1	7	2	4	12	2	5	5	3	5	19	3	89	7	23	3	48	13	10	0	26	4	7	2	3	5	13	1	0	0	0	1	7	12	4							

近辺地図・構内図



交通

タクシー：JR 京都駅から約30分

市バス：各主要鉄道駅より乗車（230円均一区内間）

主要鉄道駅	乗車バス停	市バス系統	市バス経路等	下車バス停
京都駅 (JR、近鉄)	京都駅前	206系統 ※D2乗り場から	「東山通 北大路バスターミナル」行	京大正門前
京都河原町駅 (阪急)	四条河原町	201系統	「祇園・百万遍」行	
今出川駅 (地下鉄烏丸線)	烏丸今出川	31系統	「東山通 高野・岩倉」行	
出町柳駅 (京阪)	出町柳駅前	201系統	「百万遍・祇園」行	
			徒歩約15分	—

フープバス (京大病院ライナー)：京都駅八条口 (E1のりば) ←→ 京都大学前

循環路線バス (230円均一区内間) <https://hoopbus.jp/>



京都大学総合人間学部

2020年4月1日

発行 京都大学総合人間学部

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

TEL. 075-753-6506, 6507 (教務掛)

FAX. 075-753-7874

<http://www.h.kyoto-u.ac.jp>
